

## なぜまたビザンツなのか

——ゲオルグ・オストロゴルスキー著、和田廣訳『ビザンツ帝国史』

恒文社、二〇〇一、の刊行によせて——

渡 邊 金 一

一九四〇年に初版が出、いご第二版（一九五二）、第三版（一九六三）と版を重ねる都度、大幅に手を加えられたこのビザンツ史の名著——それはまた、ビザンツを越えて、広く二十世紀の生んだ最もすぐれた歴史叙述十点の一つに優に数え入れられよう——がこのたびようやく日本語訳されるにいたった。ドイツ語原文で五一四頁の本文が日本語

訳ではなんと七四八頁と分厚いものになったのは、言うまでもなく、日本語という言葉がヨーロッパ諸語にくらべて、頁当りの情報積載量がわずかのためだが、その結果値嵩の張るものとなって、この出版不況のさなか、販売にもさしさわりが避け得ないとすればまことに困ったことである。

昨今安直な新書版や薄手本の出版が横行するさなか、この難関に敢ていどんだ訳者と出版者の勇気を多ししたい。い

ずれにせよ、初版から数えて六十有余年、その間すでに十指近くのヨーロッパ諸語訳（但、ロシア語訳はなし）がなされたこの書物が、やっとここに訳出されて、日本におけるビザンツ学も国際的にはじめてスタートラインについた観があるのを、何よりも喜びたい。

このタイムラグは言うまでもなく、ビザンツ帝国が日本からはるか彼方の国であつてしかも、今から五百年以上も前に歴史の舞台から姿を消し、もはや存在せず、現在と直接には何のかかわりもないからである。ポーリングして石油が出て来る可能性もまずないとなれば、ビザンツに興味を懐くのは、よほど物好きの好事家ぐらいかも知れない。加えて日本固有の事情がある。一口で言つて明治以来の日本の西洋史研究は何よりも、ヨーロッパに日本の近代化の

手本をもとめた当時の国是にそつて、それをイギリス、フランス、ドイツに見出した。この優等生のひき立て役が、落第生のイタリア、スペイン、エトセトラというわけである。そしてそのヨーロッパ近代を歴史先取的に実現したのは、古典のギリシア、ローマとみなされた。こうして道具立てはそろい、このアイディアは帝国大学の研究、教育研究システムの根幹に据えられた。そこでは、ビザンツなど、そもそも占めるべき場所をもつはずがないのはいうまでもない。

このような日本とは違つてヨーロッパでは、オストロゴルスキーも「序論 ビザンツ史学史」で述べているように、ビザンツに対する関心は、その滅亡後あまり時間をおかずに、ルネサンス、宗教改革と反宗教改革、「ル・グラン・シエークル(大世紀)」と啓蒙主義、そして歴史主義、と続くヨーロッパ精神史の大潮流の節目、節目にその都度深く竿さしながら様々にくりひろげられていった。そして十九世紀末から二十世紀初めには、独自の専門研究領域としての自覚をもったビザンツ学の骨組が最終的に確立された。その基礎の上に、第二次大戦が終るや、それは一斉に全面開花した。

そのなかに身を置いて当時ベックはこの活況を、同時代的な体験に裏打ちされながら展望している。<sup>(2)</sup> かれによれば、その頃相繼いで発表された概説書である「絵画的」なディール、<sup>(3)</sup>「アネックドト的」なブレイエ、<sup>(4)</sup>そしてペインズ・モス共編の代表的研究者たちの寄稿集と並んで現われたのが、「喚起的」なオストロゴルスキーであった。この動向をいち早く日本でキャッチしたのが増田四郎であった。第二次大戦中京都学派とよばれた人々が仲間うち(デジヌタンクスゲノツセン?)の会話に打ち興ずるさなか、かれは、オストロゴルスキーがその著書の第一版を発表した直後、その要約ともいふべき論文、「ビザンツ史の諸期」を書く、それをいち早く日本に紹介した。こうして日本の歴史学界は一挙にビザンツ研究の最先端のいぶきにふれることになった。<sup>(5)</sup>

日本でビザンツ研究が注目をあびるのは、続いて第二次大戦終了後はじまった冷戦下においてであった。当時日本の歴史学界では、時代区分の問題(いわゆる世界史の基本法則!)が広く共通のテーマとなっていた。それは言うまでもなく、マルクシズムの発展段階説から発するもので、それに基づくソビエト・アカデミーの『世界史』全巻の日

本語訳も出た。そこでは言うまでもなく、ビザンツも当然とりあげられ、ソビエトのビザンツ研究者たちはビザンツにおける封建制の形成について論陣を張った。西ヨーロッパの研究仲間も討論に加わり、一九六一年九月初めにはユーゴスラヴィア南部のビザンツ古都オフリダで催された第十二回国際ビザンツ研究者会議では、ビザンツ封建制をめぐって、ブルジョワ・ビザンティニストとマルクシズム(だが今からみれば、今日もはや地上にほとんど存在しなくなった「現存社会主義」・ビザンティニストの間で議論がたたかわされた。<sup>(7)</sup>)の壁が構築され、つづいて大統領ヨシブ・プロズ・チトールのよびかけで、首都ベオグラードでは第一回非同盟諸国会議が開かれた。)ビザンツ研究史上最も輝かしい成果だったといわれるこの会議を主催した責任者はオストロゴルスキーであった。ビザンツ封建制には日本の研究者たちも強くひきつけられた。なにしろかれらはそこに、日本を含めた発展段階説上の封建制のデジャ・ヴューを、共感をこめて追体験したのである、「ビザンツにも中世はあったのである!」

今回日本語に翻訳されたオストロゴルスキーの著書は、

イヴァン・ミユラーによつて企てられ、ワルター・オットーによつて受けつがれた『古典』古代学叢書』中のカール・クルムバッハーの『ビザンツ文学史』(初版一九〇、二版一八九六)という、ビザンツ学の歴史上の不朽の金字塔の改訂作業の一環として計画されたもので、同文学史改訂二版にアルベルト・エールハルトの「神学」と並んで加えられたハインリッヒ・ゲルツァーの「ビザンツ皇帝史概説」にとつて代るものであった。つづいて文学史そのものも、神学部分がハンス・ゲオルグ・ベックによつて<sup>(8)</sup>、それを除く、いわゆる世俗文学部分のうちの教養文学がヘルベルト・フンガーによつて、<sup>(9)</sup>民衆文学が同じベックによつて発表され、改訂作業はここに完成をみた。<sup>(10)</sup>

初版のゲルツァーの皇帝史の、オストロゴルスキーによる書き換えは、その書名が示すように「国家史」である。それは、今回の翻訳の題名のビザンツ「帝国史」があるいは予測させるかもしれない、いわゆるビザンツ史の総花的叙述ではなく、あくまでもその一面としての国家史なのである。この問題に入る前に指摘しなければならないのは、『叢書』中でビザンツ部門が占める場所である。

オストロゴルスキーは、先行する時代をもちろん十二分

に考慮に入れながら、コンスタンティノス大帝が東方の新都、第二のローマの建設地をコンスタンティノープルに決定した三二四年から筆をおこしている。ビザンツ帝国の出発点をどの時点におくべきか。それについては、古来さまざまな解釈が出されている。だが歴史そのものがそうであるように、そしてオストロゴルスキーも述べているように、ビザンツ帝国も政治的にはローマ帝国の、文化的にはヘレニズムの途切れなき連続体である。問題はしたがって、どこを出発点とすべきかにあるのではなく、ビザンツ帝国の開始点を一たんこうきめてしまうことから来る、よろこばしくない結果である。というのも、この国では歴史における時代区分を、どんな国たるを問わず、古代、中世、近世に三分する慣行があつて、それが今の場合ともむすびついて来るからである。その結果ビザンツ帝国は中世のくにとなってしまう。この歴史理解の落とし穴におちいらないためには、たとえば最近同じ『叢書』の一冊として書かれたアレクサンダー・デマントの『古代末期』<sup>(1)</sup>を考えるだけでよい。そこでは古代末期が、いわゆる古代にも中世にも属さない、いかに独自の時代として画かれていることか。ところが日本のビザンツ研究者は、自分の対象が中世史だと

思いこむ。更に悪いことには、システム(上述の、例の、帝国大学以来の)の側が、外からこの分類を押しつけてくる。それが、マルクシズムの発展段階説とむすびつけば、さき程の言葉が、何とも自然に湧いて来るのはいうまでもない。

このあたりで再び本題にもどつて、さて国家史とは何かについて考えてみよう。それはオストロゴルスキーにあつては、単なる政治史につきるものでもなければ、国家法制の歴史につきるものでもない。オストロゴルスキーが視野に収めるのは、ビザンツの皇帝権力が社会の隅々にまで及び、そこであらわれる敵対諸勢力と対抗したことであるし、国家が時々の経済事情のなかで、膨大な財政機構(ちなみに、同時代の西ヨーロッパでは、はじめ王は宮廷をひきつれて御料地を遍歴しながら、食いつなぎしていた一方、イスラム・エジプトでは征服後二百年近くにもなるというのに、前代からひきついだビザンツ徴税組織がそっくりそのまま機能していた)を通じて、地方の村々から税収を確保したことであるし、政治と宗教、国家と教会の、他に類例をみない入り組んだ関係(まちがつてカエサロパリズムとよばれた)からコンスタンティノープル政府が新しい神学

潮流や宗教運動に無関心では居られなかったし、ローマ教会との関係でも多様な交渉に入ったことであるし、国際政治上でも、ローマ世界帝国の外交ドクトリンから、政治威信をかけて同時代の西ヨーロッパやイスラム世界に向って自己主張をくりかえしたことであるし、それよりも何よりも、つぎつぎとバルカンに移住し、国家をたてたスラヴ民族やマジヤール民族と特別の地域的政治ブロックをつくり上げたことであるし、エトセトラ。オストロゴルスキーはこれらの点に目くばりをし、そのそれぞれについて、関係史料をあげ、研究到達点とそれをめぐる議論を的確、簡潔に付記するのである。その際のかれの立場は、かれ自身は別にのべてはいないけれども、それを一口でいえばヨーロッパ中世史家たちの「国制史」(Verfassungsgeschichte)、「つまり支配という観点から見た「社会史」(Gesellschaftsgeschichte)——ベック——とすることができよう。オストロゴルスキーのこのような立場は、かれがたどった波瀾に満ちたその生活・学問遍歴からうかがえるように思われる。手がかりは、ポスト・ウェーバーの歴史学派経済学者(と一応しておこう—後述)のエドガー・ザリーンの七十歳記念のためにオストロゴルスキーが寄稿したエッセイ

「一ビザンティニストのはじまり」である。ザリーンにさげられた論文集『アンティドローン(お返し)』の寄稿者には、私の知るだけでも、テオドール・ホイス、ルイジ・エイナウディ、アルフレート・ウェーバー、レイモン・アロン、マリオン・グレーフィン・デーンホフ、オスカー・モルゲンステン、カール・J・ブルクハルト、カール・ヤスパース等々と、二十世紀ヨーロッパ文化を代表する最高のエリートたちが、それこそ煌星の如く名をつらねる壮観さである。

オストロゴルスキーがネッカー河ほとりの大学まちハイデルベルクにやって来るのは一九二一年の秋。そこでかれはエドガー・ザリーンと出会うことになる。一九一七年のロシア革命と、つづく内戦で、百万人を越えるといわれる大量の亡命者が祖国ロシアをあとにした。オストロゴルスキー一家もペテルブルクを去ってドイツに亡命して来た。ゲオルグが十五歳のときであった。そして十九歳の時かれはハイデルベルク大学の学生となった。

戦後のハイデルベルクは、戦前におとらず文芸の花園の観を提していた。二十年代ははじめ大学の哲学科の陣容は、アルフレート・ドマチェフスキー(古代史)、ルード

ウィッヒ・クルティウス(文化史、エーベルハルト・ゴータイン(国民経済学)、カール・ハムペ(中世史)、アルフレート・ウェーバー(社会学)、ヘルマン・オンケン(歴史学)、ハインリッヒ・リッケルト(哲学)、カール・ヤスパース(精神医学、哲学)、そしてフリードリッヒ・グンドルフ(ドイツ文学)と、錚錚たる顔触をそろえていた。それでいて、モデルネの先頭をゆくベルリンとちがって、ここには一種の田舎町の面影がやどっていた。そのうちの何人かは、さきにみたように上記の記念論文集に名をつらねることになる。一九一九年以来同大学の講師であったのが経済学および経済史担当の若きエドガー・ザリー(一八九二—一九七四)であった。他の多くの若者同様オストロゴルスキーもまたハイデルベルクの人文学部門の魅力にひかれてそこに入学し、かれ自身の言葉によれば、「迷いなく、というわけではなかったが、」主に哲学を学ぶこととし、ヤスパースの講義によって新しい世界に眼を開かれた。いくつかのゼメスターを終えたのち、かれを待っていたのは主専攻部門をきめる問題であり、かれは悩んだ。研鑽を終えたら哲学者になるという気持が強く湧いた。近親者や友人たちから何度も尋ねられて、出来ることなら美

術史ないし考古学をやらうとも考えた。それには、その道の大家ルードウィッヒ・クルティウスの講義に大いに心をひかれるところがあつたからである。揚句の果、かれは當時特に学生たちに人気の高かつた国民経済学をえらぶことにきめた。かれの言葉によれば、「食いつばぐれ美術」を断念して、「つぶしの利く」学問分野を選択したというわけである。

こうしてオストロゴルスキーは、さしあたりベターなことがふさがれているという消極的理由から国民経済学の道を歩みはじめるが、このあきらめ気分は長く続かなかつた。それを払拭してくれたのが、該博な知識と、偉大な人物固有の迫力で語りかけるアルフレート・ウェーバーの講義であり、とりわけ学者として「模範的な明快さで事物の必然性を提示し、聴講者により広く、より深い興味をおこさせて、夫々が自分自身の思考を持つようにはたらきかける」エドガー・ザリーンの講義と演習であつた。「それを聴いた者は、講義者の知識とその精神的展開によって自分自身がいかに豊かなものにされたと感じた。聴講者は講義でつきからつきへと湧きおこる発想、とりわけ独特の話し振りにひきこまれた。」その結果オストロゴルスキーは経済学の

学習で、いかなる意味でも、当初予測していた以上のものを得たのである。

かれが特別興味を懷いたのは経済理論、とりわけ経済史であった。やがて博士論文を書かなければならない時がやってきたとき、かれは経済史のテーマを択ぶことをきめた。「但しこの決断はけっしてそれ程首尾一貫したものでなかった。「私自身それを承知しており、私はふたたび〈食いつばぐれの美術〉の野原に足をふみ入れた。ビザンツ史〔つまり、およそなんとも経済史っぽくない歴史研究！筆者〕の領域からテーマを考えたとすれば、まさにそうであった。「私が自分のプランを示し、そしてまた私の懸念をも同時にのべたとき、ザリーン教授はその点については特に気にかける様子はなかった。かれは当時まだ私をよく知らなかったが、かれには、へ役に立たないゝ事物が私の性に合っていることを心得ていた。私の提案はかれの氣に入った。だがかれは、自分はビザンツ史については詳しくないから、ほかの大学に行つてビザンツ史の専門家について論文を書くことを考えたら、とすすめた。だが私は聞かなかつた。たしかに私の計画はなお曖昧模糊としていたが、私の決意は固かつた。私はハイデルベルクにとどま

り博士論文をかれの許で書きます、とのべた。かれはそれを承知したが、その時のかれの言葉はいまでもよく覚えてゐる。それは、自分はかかる作業を本来の意味では指導できない、だが自分に時間の許す限り喜んでお手伝しよう、というものだつた。かれはまた私に向つて、さしあたり、自分よりビザンツをよく知っている人々とつきあうよう、すすめた。」

ゼミナール選考でいつもみかける大学日常風景。だがこの場合は、学問をこれから始めようとする、学問への熱意に燃えた新入生と、それに謙虚に応えようとする誠実な若い教師との、静かだが運命的な出会いの模様が心につたわつて来る。オストロゴルスキーにとつて、それが、これから歩むべき道を決定づけた。こうしてはじまるザリーンとの交わりでオストロゴルスキーが身につけるのは、明晰な概念を手段として歴史を理解するという社会科学固有の基本的態度であり、それは、たとえば文献学から出発する一般の歴史研究者からはまず期待できないものだったといえるかもしれない。それにつけても思い起されるのは、マックス・ウェーバーの『職業としての学問』のなかのつぎの言葉である。かれの学問遍歴は法律学からはじまり、

経済学を経て、最後に社会学にゆきつくのであるが、晩年の講演『職業としての学問』のなかで、かれはつぎのよう  
にのべる。社会科学において、「専門分野の研究者が、隣  
接領域に足をふみ入れる作業は、吾々が専門研究者として  
つねにおこなうものだが、それは社会学者としては、どう  
してもやらざるを得ないものである。ただその時、社会学  
者にはあきらめの意識がつきまとう。専門分野の研究者た  
ちに向って、かれらがその専門領域からはそう容易には考  
えつかぬ有益な問題設定を提示してやるのが社会学者であ  
る。けれどもその場合、社会学という学問自体はどうして  
も不完全たらざるを得ないのである。」ウェーバーは、近  
代の学問というものがどうしても専門化の道をたどらざる  
を得ない必然性を認めた上で、しかもそれを越え得る道と  
して、社会学者だけがなすことができ、またなすべき使命  
として、「問題設定」を指摘したのである。ポスト・  
ウェーバーの歴史学派の一人としてザリーンはオストロゴ  
ルスキーに向って、実は本人自身にもはつきりわかってい  
ない本意を、「気付かせてやった」(deuten)ウェーバー  
のよく使う言葉)のではないだろうか。

ザリーンのすすめたがってオストロゴルスキーは美

術史家カール・ノイマンに会った。というのにもかかはかつ  
てビザンティニストとしてスタートし、若くして才気あふ  
る名著『十字軍前の世界でのビザンツの地位』(一八九  
四)をはじめとする輝かしい諸研究をあらわしていたから  
である。だが面会は失望に終わった。オストロゴルスキーが  
自分のビザンツ研究計画を短い時間だが開陳しても、ノイ  
マンはこれといった反応を示さなかった。もはやかれは、  
ビザンツ学そのものに興味を持たなかったようである。こ  
うして肩透しをくってオストロゴルスキーはがっかりする  
が、それを補って余りあるのが、一九二二年ハイデルベル  
ク大学に加わったベルシー・エルンスト・シュラムとの一  
九二四年冬期ゼメスターでの出会いである。この中世およ  
び近世ヨーロッパ史家は、広い視野で歴史を展望し、のち  
に国制史や支配のシンボルについて大著をあらわすことに  
なるが、オストロゴルスキーはかれの中世精神史の講義を  
聴き、ゼミナールで、中世キリスト教世界の東西両帝国の  
あいだの交渉についての基本史料、クレモナの司教リウト  
ブランドの『コンスタンティノーブル使節記』を呼んで、  
シュラムの名人芸的なコチのもと、形成途上の未完成の  
ビザンティニストは大いに啓発される。こうしてオストロ

ゴルスキーは、ビザンツにとりわけ関心を持ち、またビザンツのことに並外れて詳しいこの歴史家と親しい交りを重ねることができた。前後するが一九二二―二四年の冬期ゼメスターには客員教授として招かれてハイデルベルク大学でイギリス経済史の講義をしたルヨ・ブレンターノが居たが、オストロゴルスキーはこの歴史学派経済学者を訪問する機会があった。その時ブレンターノが会話のはじめとかわりに、自分はビザンツ経済について、講義でビザンツ国民経済について記した以上のことは言えない、と語ったことをオストロゴルスキーは覚えていた<sup>(1)</sup>。

こうしていろいろ体験をつんだオストロゴルスキーは、結局、自分の力で研究の道をきりひらかなければならないと覚るが、そのなかでおのずと道もひらけてくる。探し続けた論文のテーマにぶつかったのである。それはワルター・アシュバーナーが聖マルコ教会附属図書館の一コーデックスのなかで発見し、『ジャーナル・オブ・ヘレニック・スタディーズ』(*Journal of Hellenic Studies*) 35 (1915) で発表した『ビザンツ徴税要綱』であった。ザリオン自身もそれに詳しく目をおしてくれた結果、二人はそれが博士論文のテーマとなりうる、という結論に達した。

ただその解釈はけつしてたやすい仕事でないことも、同意見であった。というのも、この徴税に関するマニユアルは、その編者も無名で、編纂年代も、これから確定しなければならなかったからである。テキスト本文は徴税に関する専門用語であふれており、それを明かにするために、テキストそのものの説明が必要であった。オストロゴルスキーは毎日それと向き合ってその謎を解くために、テキストの一行一行を訳出し、日が暮れると、訳出した部分を持って、ネッカー河を越えたノイエンハイムのザリオン宅を訪れては、かれと一緒に検討を重ね、討論をおこなった。「対話は半時間から優に一時間に及び、それは、かれのゼミナリストが多勢だったのを考えると破格のことだった。」

こうしてザリオンは最初の面接の際オストロゴルスキーに対しておこなった、「時間の許す限り喜んでお手伝しよう」という約束を果たしてくれた。経済史の問題についてのザリオンの深い洞察力は論文作成の上で得難い支えとなり、加えてかれのギリシア語知識がそれを補強した。(かれは一九二七年バーゼル大学に移り、長らくスイスにとどまってドイツに戻らなかつたが、その時期にプラトンのいくつかの対話篇の翻訳を刊行した。) オストロゴルスキー

はザリーンと、『要綱』のいくつもの問題について徹底的に議論したが、これはオストロゴルスキーにとって有益であり、その都度ザリーンの思考の鋭さと、経済史および社会史の諸現象にたいするかれの洞察の確かさにおどろきを禁じえなかった。「作業は自分にとって喜びであったが、かれにとっていつそう喜びであったと思う。」アシブナーのテキストが提供したのはビザンツの租税管理についての基本原則であり、また十世紀のビザンツ村落団体の組織であった。『徵税要綱』はそれ以後すでにビザンツ学の共有財産となったが、オストロゴルスキーがそれと取組んだ頃は、全く新しい知識であった。オストロゴルスキーは『徵税要綱』を他の史料とつきあわせ、それを、既に知られた歴史像のなかにとりこむという魅力ある作業にとりかかった。

かれは一九二四年秋からはじまる一年の大学カレンダーをパリで過ごすことになった。そこでかれはフランスの代表的ビザンティニストたちの講義をきいた。シャルル・ディールからはビザンツ史を、ガブリエル・ミレからはビザンツ美術を、そしてジェルメーヌ・ルイヤールからはビザンツ古文書学を。そしてパリのいくつもの図書館を訪れ

て、取組んでいる論文を布衍し、完全なものとするようつとめた。論文は「十世紀のビザンツ帝国の農村租税共同体」として、一九二七年ザリーンのはからいにより『社会経済史季刊誌』(Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte)に掲載されるはこびになった。この同じ年には、同じ『徵税要綱』はまたミュンヘンのフランツ・デルガー(一八九一—一九六八)もとりあげ、テキスト本文とその詳細なコメントールを『ビザンツ年報』(Byzantinische Zeitschrift)附録の『ビザンツ・アルヒーフ』(Byzantinisches Archiv)で発表した。この一対の記念的作品は、やがて戦後アトス修道院文書の刊行も進んで開化するビザンツ農業史・財政史の出発点となるであろう。その二年後オストロゴルスキーは『ビザンツ・イコノクラスム闘争史の研究』を書いて旧東ドイツのプレスラウ(現ポーランドのプロツラフ)大学に招かれるが、それはながく続かなかった。一九三三年一月ナチスが選挙で勝利したのである。かれはこの歴史的気象状況の変化を察知してドイツから逃れ、プラハに居を移した。そこでは、かれと同じロシア革命の亡命者であるビザンツ美術の大家ニコティム・パヴロヴィツ・コンダコフ(一八四四—

九二五)の没後、その弟子たちによってつくられた、カール(四世)大学哲学部門附置の《セミニウム・コンダコウィアーヌム》(一九三八年ベオグラードに移転)のメンバーとなった。オストロゴルスキーは同名の機関誌にすでに創刊(一九二七)以来つづけて寄稿していた。その後間もなくかれは、ベオグラード大学のドウラグティン・アナスタシエヴィッチの後継者として同大学のビザンツ学部門の正教授に就任した。そしてここを本拠に、国際的ビザンティニストとしての活動がはじまった。そのなかで『ビザンツ国家史』の執筆準備も着々とすすんだ。

だがしかしその間ヨーロッパでは国際政治の暗雲がますます低くたれこめ、ついに一九三九年九月一日ドイツはポーランドに侵入、ここに第二次大戦がはじまった。すでにその年の三月、チェコスロヴァキア——その首都にオストロゴルスキーは短期間だが滞在していた(上述)——はドイツ保護領となり、開戦の四日後には、「保護国」スロヴァキアがドイツ側に立つて参戦した。一九四〇年ミュンヘンでの著書出版にこぎつけるまで、おそらくいくつもの関門が待ち構えていたであろうことは想像にかたくない。一九四一年四月、ヒトラーは東部戦線での膠着状態に局面

の転換をはかるとともにバルカンでもたつくイタリア軍に活をいれるため(一九三九年四月アルバニアに上陸したイタリア軍はギリシアの抵抗にあつて、南下を果せなかった)、突如ベオグラードに大空爆をおこなった。オストロゴルスキーはかろうじて九死に一生を得たものの、同僚のビザンティニスト二人はその犠牲になった。

第二次大戦が終つてビザンツ学の新しい国際的地平がひらけると、そこでオストロゴルスキーは、以前にもまして牙え渡つた布石で、つぎからつぎへと注目すべき業績を発表していった。ベオグラードではユーゴスラヴィアのビザンツ研究専門誌《Zbornik radova Vizantolškog instituta》第一巻が一九五二年に発刊されて、ビザンツ学の新たな一拠点が出来た。

オストロゴルスキーの多面的な研究活動を社会経済史の領域に限つてのべれば大約つぎのようになるであろう。

かれは一九四八年、ブラクティカとよばれたビザンツ土地台帳についてロシア語で、一九五一年にはプロノイアとよばれたビザンツの大土地所有の特別の一カテゴリーについてセルボ・クロアチア語で、基本的研究を著し、両者はあわせてアンリ・グレゴワールによつて、ポール・ルメ

ルルの協力を得て一九五四年フランス語訳され、こうしてスラヴ語圏での研究の蓄積が国際的ビザンツ学の共有の財産となった。<sup>(15)</sup>一九五六年にはビザンツ農民層が考察の対象となり、自由農民Ⅱ国有地農民という衝撃的テーゼが学会を沸かせた。<sup>(16)</sup>一九五八年にはビザンツ大土地所領の不輪特権が取り上げられた。<sup>(17)</sup>一九六二年にも同じく農民層が今度は、『農民法』、『徴税要綱』、『テーベの土地台帳』というビザンツ農業史にかんする三大史料を通観して、その変化の相から追究され、一九七一年には十一世紀に出現するビザンツ大土地所有軍事貴族像が提示された。<sup>(18)</sup>これら研究を通じてオストロゴルスキーの関心が結ぶ焦点は、一口でいえば、十一世紀にはじまるビザンツの「封建化」<sup>(20)</sup>の問題であつた。

コムニズムをのがれ、ナチズムをさけてユーゴスラヴィアを新しい故国としたオストロゴルスキーは一九七六年、七十四歳でこの世を去った。もはやどこに亡命することもなく、後半生を過すことができたこの国に向つてかれは、中世セルビアの偉大なツァール、『ステファン・ドゥシヤン死後の没落の時代』(一九六五)をはじめとする研究をささげた。

最後に、冒頭のタイトルに戻ろう。なぜまたビザンツなのか。それは筆者の、日本のビザンツ研究者たちへのメッセージであり、その一人としての自分に対する問いかけでもある。それにつけても思ひ出されるのは、アウグスティヌスの言葉として教えられたラテン語の一句、*noſse amantis est*である。「愛してこそ知る。」これは何もビザンツ学だけに限ったことでなく、学問一般に当てはまる。

愛とはおよそ非合理的なものであつて、別に何か合理的な理由があつてそうする行為ではない。何かと理屈を持ち出して、それは後知慧ぐらいでしかないだろう。偶然の積み重なりの中で迷いながらビザンツ研究の道にふみこんだオストロゴルスキーの場合も然り。それに、およそ愛情とは人によって千差万別であつて、けつして一様ではないだろう——何となく興味を持つ、から、憑かれてしまう(*betören*される、*Torheit*にとりつかれてしまったベツクの場合)までと——。たといそうだとしても、それは流行に浮かれた結果ぐらいだろう。ただアウグスティヌスの言葉はけつして一方通行ではない。逆の通路もある。*amare noscentis est*。人は知ることによって愛を深めることも出来る。合理化することも出来る。ビザンツを対象と

して選り取ったことを人に、そしてもちろん自分自身に納得させることも可能となる。その一助となるのが、たとえば今回翻訳されたオストロゴルスキーの著書である。ビザンツ学を選び取った以上、ビザンツを知らなければならぬ。この書では、およそビザンツ学というものが何を対象とする学問であるか、それが数世紀の歩みのなかでどういう課題を背負い、それとどう取組んで来て今日にいたったかが、ほぼ尽くされている。たしかにビザンツ学は盛況を呈しているように見受けられる。昨年パリで開かれた第二〇回国際ビザンティニスト会議に集った研究者の数を思うにつけ、一昔前とは隔世の観がある。だが、四分の一世紀前にアテネで開かれた同じ会議でのベックの言葉が再びきこえて来る。「人々は、他人がすでになし、しかも多分、より徹底的に、かつ、よりすぐれたやり方でなしたことを観察するために、もはや周囲をながめ渡さない。ずっと以前に、はつきりと、何等うたがいの余地なく確定され、発表されていることが、自分が発見者だというナイーヴな欲びのあまり、新機軸だとして輝かしく提示される事例がどれほど多いことか。実際、再三再四驚くばかりである。このおめでたい発見者が一時時間ときをさいて文献目録をばらば

らとめくつてみたら、かれは、すでに自分より前に、他人が何かを為し遂げているのを見付け出すことが出来た筈である。」<sup>(2)</sup>一人一人が手はじめに、オストロゴルスキーが吾々にのこしてくれた研究総体のこの座標軸にまで一まず立ち戻って、そのどこに自分の研究を位置づけることが出来るか、思索してみたらどんなものであらうか。

(二〇〇一・一一・一四)

- (1) Georg Ostrogorsky, *Geschichte des byzantinischen Staates*. 3. Aufl. 1963.
- (2) Hans-Georg Beck, *Byzanz. Der Weg zu seinem geschichtlichen Verständnis*. Forschungsbericht. *«Saeculum»* 5 (1954) S.87-103.
- (3) Ch. Diehl et G. Margais, *Le monde oriental de 395 à 1081*. Ch. Diehl et R. Guilland, *L'Europe orientale de 1081 à 1453*. Paris 1936/1945.
- (4) L. Bréhier, *Le Monde byzantin*. I. Vie et mort de Byzance. II. *Les institutions de l'empire byzantin*. III. *La civilisation byzantine*. Paris 1948/1950.
- (5) *Byzantium. An introduction to east Roman civilization*. ed. by N. H. Baynes and H. St. L. B. Moss. Oxford

1948.

- (6) 増田四郎『ヨーロッパ社会の誕生』一九四九、一六九—一七九頁(一九四二執筆) G. Ostrogorsky, Die Perioden der byzantinischen Geschichte. *Historische Zeitschrift* 163 (1941) S.229-254.

なお同じ頃、ロシアに関心をもった亀井高孝の『東ローマ帝国史』一九四八が刊行されたが、執筆の事情は詳らかにしない。オストロゴルスキーの著書の初版は、戦争の最中、果して日本に届いたかどうか不明である。いずれにせよ吾々が接するのは、戦後の第二版からである。

- (7) 議論は具体的には、ソビエト・ビザンティニスト側の主報告「ビザンツ帝国の都市と農村—四—一二世紀」と、西ヨーロッパ側からのルメル以下の副報告というかたちで進行した。この主報告の翻訳が同じタイトルの、ビグレフスカヤ他著渡辺金一訳である、一九六八。ビザンツ封建論争については、渡辺金一著「ビザンツ社会経済史研究」一九六八、第一論文「ビザンツ封建制の諸問題—論争の展望—」、更には拙稿「ソビエト歴史学の変化」(一九八二)「思想の言葉」『思想』一九六二—一九八九 III (二〇〇一)を参照。

(8) H.-G. Beck, *Kirche und theologische Literatur im*

*byzantinischen Reich*. 1959.

- (6) Herbert Hunger, *Die hochsprachliche profane Literatur der Byzantiner*. 2 Bde. 1978.

(10) H.-G. Beck, *Geschichte der byzantinischen Volksliteratur*. 1971.

- (11) Alexander Demandt, *Die Spätantike. Römische Geschichte von Diokletian bis Justinian, 284-565 n. Chr.* 1989.

(12) たとえばオットー・ブルンナー「ヨーロッパ——その歴史と精神——」石井柴郎他訳「一九七四」のごときをみよ。

- (13) G. Ostrogorsky, *Edgar Salin und die Anfänge eines Byzantinisten*. ANTIAPON. *Edgar Salin zum 70. Geburtstag*. 1962. 91-97. ザリーンにはこの翻訳があることを付記しておこう。「ザリーン・経済学史の基礎理論」高島善哉訳、一九四四。

(14) それは「ルヨ・ブレンタン」『欧羅巴古代経済史概説』舟越康寿訳、一九四三年、として翻訳され、その第十三章が「ビザンツ国民経済」であった。

- (15) G. Ostrogorsky, *Pour l'histoire de la féodalité byzantine*. Traduction française de Henri Grégoire, publié avec la collaboration de Paul Lemerle. 1954.

拙稿の紹介参照《史学雑誌》六六・六（一九五七）六〇—八二頁。

(16) G. Ostrogorski, *Quelques problèmes d'histoire de la paysannerie byzantine*, 1956.

(17) G. Ostrogorski, Pour l'histoire de l'immunité à Byzance. Traduction française de Henri Grégoire, *《Byzantion》* 28 (1958) pp.165-254. 拙稿の紹介参照《史学雑誌》七〇—（一九六一）六八—八九頁。

(18) G. Ostrogorski, La commune rurale byzantine. Loi agraire-Traité fiscal-Cadastré de Thèbes. *《Byzantion》* 32 (1962), pp.139-166.

(19) G. Ostrogorsky, Observations on the aristocracy in Byzantium. *《Dumbarton Oaks Papers》* 25 (1971), pp. 1-32.

(20) では古代末期・中世初期のコロヌス制大土地所有者階層をどう把握するのか。オストログルスキーはここではその点にふれていない。かれはビザンツ封建制論をくりひろげるとき、比較のために西ヨーロッパ中世史家のマルク・ブロック、フランソワ・ルイ・ガンスホフをひきあいに出す。

『歴史における封建制』の編纂者ラシュトン・クールボーン Rushon Coulborn (ed.), *Feudalism in History*.

1956. は「歴史における斉一性」を立証しようとする。

だが訳者の増淵龍夫も明快に指摘するように、この目標自体が歴史学では意味のない問題設定なのである（アメリカが使命と感ずる国際秩序樹立という、政策立案のためならいざしらず）。『歴史』の課題は「すべてはすでに存在していたこと、そしてすべての、あるいはほとんどほとんとすべての相違は程度の差であること——そのことはたしかに正しい——をつぎつぎと証示すること」にのみあるのではない。この点にのみ『歴史』の課題があるとは考えない者は、あらゆる平行現象にもかかわらず、つぎつぎとあらわれてくる転位に力点をおくであろう。そして、二つの発展軌道の一方が他方にたいしてもっている特性をみいだすためにのみ、両者の類似点を利用するであろう。この特性はしかしながら実際まったく大きいのである。（マックス・ウェーバー）。

クールボーンが援用している西ヨーロッパ史家オットー・エンツェ Otto Hintze, *Wesen und Verbreitung des Feudalismus. Staat und Verfassung*, 1941. の場合、増淵ものべているように、「エンツェは」……社会類型としての封建制をもつものとして、西ヨーロッパのほかにはロシア、イスラム諸国家、及び日本を挙げる。それぞれ、その枠内では強い特殊性と偏差をもつものであるが、

少なくとも、ここでは上述の三つの要因「主従制的個人契約にもとづく戦士制の兵制的要因、荘園制にもとづく社会経済的要因、政治権力の分散所有にもとづく政治的要因」が……相互に機能し合って社会的全関連を形成していることが発見される。ところで、ヒンツェが、このように、封建制を諸要因の相機能しあう全関連の体系として、いわば類型として静態的に把握し、それを比較の規準として他に類比をもとめたのは、それ自体が目的ではなく、より基本的な問題として、それがどのような歴史的条件の下において、国家形成的な力として作用するかを、動態的に把握しようとするためである。」

イスラム史家の側からはクロード・カーエン Claude Caten「《封建制》」という言葉の使用についての若干の考察「渡辺金一、加藤博共訳『比較社会経済史ーイスラム・ビザンツ・西ヨーロッパー』一五八八所収、同じ問題と取組む。かれは、西ヨーロッパ中世史家ロベール・ブートリユツシュが「アルプス以北の人間として、歴史のある時点にライン河とロワール河との間の地域において実現された状態の確認から出発し、しかる後に、他の人間諸社会において、どの程度それに匹敵する諸現象が存在したかという問題設定をおこなう」点につきまとうへその緒を批判してこう説く、「西洋の封建制がそ

れ独自の諸性格をもっていることは、いうまでもない。しかし、こうした性格を強調することは、とりまきおさず、西洋封建制と歴史上の他の諸体制との間に存在する差違を強調することにほかならない。それにもかかわらず、諸類似点もまた存在している。そしてそれぞれの性格にどれ程の重要性を与えるかというさじ加減には、何がしかの主観がつきまとう。古代の政治家ポセニダスがその後どうなるのか、を理解しようとする社会史家として、我々が取り組むべき主要問題は、諸タイプの社会の発展において通過すべき必然的な諸形態が果して存在するのか、そして、もしそれが存在するとすれば、それらはどのようなものから構成されているのか、を知ることである。したがって、理にかなった態度とは、恣意的に選択された社会から出発するのではなく、「一つの点に合流する諸傾向がみられるすべての社会から同時に、そして同等に、出発し、そこでの諸類似点、諸相違点、さらには、それらを制約している条件を明らかにすることであろう。」

ポール・ルメルルはビザンツ封建制論争で、ソビエト・ビザンツ学陣営に対抗するもう一方の陣営の旗頭として、重要な論考、P. Lemerle, Esquisse pour une histoire agraire de Byzance, les sources et les problèmes (Revue historique) 219 (1956) pp.32-74, 254-284;

220 (1958) pp.93-94 を発表し、続いてその英語版 *The Agean History of Byzantium*. 1979 を刊行したが、そこで論争を回顧してこう述懐する、<sup>6</sup>「おきれもないのは、教条的先入感がビザンツ封建制について誤まった論争をよびおこし、<sup>7</sup>当てるのな追求 (a wild-goose chase) へとかりたてたということだ」。

だが、かくも物議をかもす封建制概念のバベルの塔からぬけ出て、ビザンツ研究では一層のことボランニーの再分配社会というもう一つのモデルを使ったら、<sup>8</sup>という試みがこの三点の拙稿である。K. Watanabe, Modell "Redistributions"-Gesellschaft. *《Studies in the Mediterranean World. Past and Present》* x (1986) S.1-9.; Id., Modell *《Redistribution》* in der Geschichte. Der Fall Byzanz. *《New Eastern Studies》* Bulletin of the Middle Eastern Culture Center in Japan. V (1991) S. 461-468.; Id., Peut-on parler encore de féodalisme byzantin? - Essai d'un autre modèle, *《redistribution》*

*《Mediterranean World》* XIII (1992) pp.1-8.

(21) H.-G. Beck, *Byzantinistik heute*. 1977. 拙訳「ビザンツ学の今日」聖心女子大学キリスト教文化研究所、『宗教と文化』8 (1982) オットー・クレステンンのベックへの追悼 X Otto Kresten, Nachrufe Hans-Georg Beck 18. 2. 1910-25. 5. 1999. *《Bayerische Akademie der Wissenschaften, Jahrbuch》* 2000 は上記のベックの言葉についてこうのべる、<sup>9</sup>「ベックの書くものはかつて人も知る厳しいチェック機関であったが、今日のビザンツ学ではこのような役所はますます見掛けなくなった。そして、ベックの『ビザンツ学の今日』が来るべき千年にも、ビザンツ学のすべての入門者たちの必読の書となつてほしいという、この追悼文の著者としての私の願いも、おそらく満ちることはないうであらう。」それにしても、この二つのマエストロたちは相繼いで舞台を去った。二十一世紀のビザンツ学ははたしてどこにゆくのだろうか。

(一橋大学名誉教授)